

大図研京都支部報

〒606 京都市左京区吉田本町 京都大学経済学部図書室 沢居紀充発行

京都市中央図書館の南館にあたって

—「作る会」の財団委託反対運動の経過と今後のとりくみ—

昨年9月に市立図書・社会教育施設の財団委託構想が明らかになって以来、「みんなの京都市立図書館・社会教育センターを作る会」(80.10.14 結成)が中心となって、「委託反対斗争」とりくんできた。大図研も京庫連、図内研、社全協、その他の諸団体と共に結成当初から「作る会」の活動に参加した。私たちの反対運動にまかかめらす、京都市はこの4月13日に強引に財団委託の形で京都市中央図書館・社会教育センターを開設した。しかし内容的には、当初の全面委託から、大中に後退する形で、一定数の市取員を配置せざるを得なかった。図書館について3名の市取員(司書有資格者)が配置された。これは勿論十分な人数と

は言えないが、私たちの運動の一定の成果と言える。

開館当日、私たちは「京都の社会教育施設を考えるつどい」を開催、全国各地から集まった図書館・社会教育関係者、文庫関係者等から貴重な意見や感想を聞いた。

「無いよりましだが」という響保はあるものの、99%の人達が図書館社会教育施設の先行きを懸念していた。当日、明らかになった施設・サービス面についてだけみて、例えば、児童室の階段が危ない、児童図書の内容に問題がある、貸出しに時間がかかりすぎる。図書冊数そのものが不足、目録が不備等の問題点が指摘された。私たちが再三、再四、市当局に図書館・社会教育施設の構

想の内容を明らかにし、専門家や地域文庫の関係者をはじめとする市民の声を十分聞く形で、図書館・社会教育センターの建設が進められてきた。容易に避けることのできた、初歩的な欠陥もここには見られる。

図書館協会の栗原氏は、集会の場で、将来、この京都府中央図書館が京都市の直営になるよう、市民が運動すべきだと提言された。不十分ながら、図書館が木プンしたことで、市民の図書館に対する関心は高まってくるのが見待たれる。その中で市民ひとりひとりが本当に使いやすい市民のための図書館のあり方を考えはじめたら私たちの今後の運動もずっしやりやすくなるのではないだろうか。「民間の活力を生かす」というもっともらしい口実で、事実上は安上り行政が目的の財源委託を、私たちの運動によって一定の歯止めはかけることができた。今後更に運動をつみ重ねることで、事実上、市の直営図書館にすることは不可能ではない。しかし、私たちが運動を放棄

すれば、市は再び、全面委託へと後退をはじめめるかも知れない。

運動のくわしい経過については、「委託」反対運動資料集が「つくる会」から出されているので、参照していただきたい。これまで、請願署名・カンパ等を通じて多くの方々との協力を得ることができ、中でも請願署名については、大団研としても1200名余の署名を集約することができました。今後のとりくみについては、当面、6月6日(土)に「つくる会」の総会を開き、その中で、開館1ヶ月余の中央図書館の現状分析と運動方針について討議する予定なので、できるだけ多くの方が参加されるよう希望します。

毎日新聞・余録の無責任
論調に抗議

最後に、毎日新聞(4月29日付朝刊)の余録での無責任な論調に一言抗議しておきたい。

余録では開館時間が長いという一点だけを持って、財源直営の図書館

万才をおっしやっている。本当にさうだろうか。戦後のなかんずく昭和30年代半ばからの公共図書館の発展的原動力がどこから生まれたのが、まじめに検討されたのだろうか。子供も自分達も良い本をいっぱい読みたい、読ませたいという願いが住民運動に結集し、それに応えようとする図書館員と自治体の誠実な姿勢と努力が、市民に親しまれる多くのすぐれた公共図書館を誕生させたのだ。

これは、日本における公共図書館発展史の常識ではないか。術僅時間ながれば全てが許されるわけでもないだろう。財団委託から生ずるさまざまな問題点は全て指摘済みである。

私たちの言い分にもるっきり耳をかさないばかりか、あからさまな嘲笑をあげせ、行政に一方向的な肩入れをする余録での真意はどこにあるのか。「民間の活力を生かした」民間委託の福祉施設や社会教育施設が全国で続々と誕生しつつある。これが本当に日本の社会教育や福祉を豊かにする方向だと余録では信じて、書かれたのだろうか。広大な影響力を持つ新聞人は、もう少しまじめに見強して、公平な記事を書いて欲しいものだ。嘲笑や悪罵の中から実のある論争は生まれない。

(京大文学部図書室・藤原俊夫)

京大班 例会 報告

— 英米図書館雑誌の抄録づくりをめざして —

大図研・京大班では、日常活動を定着させるために、月1回の例会を3月からもっています。当面、新着の主として英米の図書館雑誌の中からめぼしい記事をひろって、集

んでいます。論文を忠実に訳すというより、内容にそくして、あるいは内容にとらわれずに自由に討論することに重点をおいています。

3月例会と4月例会では、Karl

J. Weintraub: The humanistic scholar and library. (Library Quarterly, vol.50, no.1, pp.22-39.) を

5月例会では

Eugene Garfield: Is information retrieval in the arts and humanities inherently different from that in science?

The effect that ISI's citation index for the arts and humanities is expected to have on future scholarship. (Library Quarterly, vol.50, no.1, pp.40-57) を

とり上げました。

機械化研究グループ活動報告

— L.C.マーク ジャパン・マーク等の実務内容について —

機械化研究グループでは5月9日(土)に京大附属図書館情報管理棟の隅田氏をキュータにむかえ、京大PAIRSを用いたLC MARC実務内容及び JAPAN MARC 実務内容につい

て、話し合いました。なお次回6月6日(土)は、京大大型計算機センター技官の菊田氏をむかえ、同センター図書館の機械化について話を聞く予定です。

5月例会・おしらせ

戦時下の大学図書館活動

— 龍大における軍事文庫・勤労文庫・奉仕文庫について —

報告者・成山 稚康 (龍^{京大}谷大学図書館)

5月23日(土) 2-4じ

京都大学附属図書館会議室